

潮

しおさい

騒

表浜海岸の浸食、農地荒廃、農村生活環境の変化などの課題に対応し、表浜地域の総合的な整備促進を図るため、神戸・大草・六連・東部の4校区の地域住民が主体となり、田原町役場などの関係団体を加えた「田原町太平洋岸総合整備促進協議会」が発足したのが平成8年1月16日のことです。

その後、協議会では地域整備の指針となる「太平洋岸地域整備基本構想(サングリーン21)」、エリア別の整備計画として「海浜・崖森エリアの基本計画(表浜自然ふれあいガーデン)」及び「農地エリア整備に関する地元検討案(農村・農地の再生プラン)」を策定し、事業の推進を図っています。

また、昨年11月には表浜の自然景観の素晴らしさや海岸浸食の現状を町内外にPRし、海岸整備の促進を図ることを目的とした「表浜自然ふれあいフェスティバル」を開催しました。

これらの事業にご協力いただきました関係校区の皆様には感謝いたしますとともに、これからもこうした地域づくり活動にご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



地引網漁(写真:河合孝雄)

CONTENTS

目次

- 創刊あいさつ 協議会組織 顧問あいさつ.....P.1
- 整備促進のための計画づくり.....P.2
- 特集「地引網」.....P.3~P.5
- 表浜むかし話「大漁不動様」.....P.6
- 表浜写真館 平成11年度の事業計画.....P.7

創刊あいさつ



より多くの方々に、協議会の活動内容や地域で進められている各種事業に関する情報提供を行うとともに、この地域の素晴らしい自然や先人達の残した文化などを紹介することを目的として、地域情報誌「潮騒」を発行することとなりました。

我々の愛するこの郷土がこれからも人々に幸せをもたらす地域であり続けるために、誰が何をすべきか、表浜地域に生きるとは何かを再認識できるような冊子として編集したいと考えています。

平成11年10月

田原町太平洋岸総合整備促進協議会 会長 小川孝治

協議会組織 平成11年10月現在

目的 田原町の太平洋岸地域の総合的な整備促進

役員 会長 小川孝治(神戸校区総代)
副会長 富田 勇(大草校区総代)、河合孝治(六連校区総代)、小笠原 泉(東部校区総代)

委員 町議会議員 大羽 敏、河辺正男、彦坂雄三、富田秀穂、多田辰郎、伊与田知養、川口治吉
漁業関係者 大谷一郎(神戸漁業協同組合組合長)、大羽 清(神戸漁業協同組合大草支部代表)、西山初雄(六連漁業協同組合組合長)
町農業委員 大谷健吉、鈴木敏夫、西山 作、安田和司
役場関係者 川口保夫(助役)、鈴木啓之(教育長)、河辺光明(経済部長)、鶴飼正彦(建設部長)、光浦貞佳(都市整備部長)

事務局 田原町役場総務部企画人事課 菰田稀一(総務部長)

顧問あいさつ



日本有数の農業地帯の一翼になう本町太平洋岸地域は、国際的な農産物自由化に対応した農地基盤再整備や太平洋新国土軸を形成する伊勢湾口道路の整備など、本町が21世紀に向けて取り組まなければならない大きな課題を抱えており、これらの実現なくては、本町の更なる発展は望めない状況にあります。

これに加えて、海岸浸食対策や集落環境の整備・改善などについても、積極的に進めてまいりたいと思いますので、それぞれの事業に関係いたします皆様方のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

田原町長 白井孝市



表浜の雄大な景観や町の中まで響いてくる海鳴りには、人の手の及ばない自然の偉大さを感じます。この恵まれた地域をより良いものとし、次世代に引継ぐことは現代に生きる者の責務ではないでしょうか。

国家的に行政改革が進められている中、これからの地域づくりは、行政主導から住民主体へと移行しつつあります。表浜の皆さんが主体となって様々な事業に取り組むこうした活動は、今後ますます脚光をあびてくるものと思われます。

協議会のご発展をご期待申し上げます。

愛知県議会議員 鈴木 愿



本町の農業は、先人の並々ならぬ努力によって成し遂げられた豊川用水事業・農地開墾により目覚ましい発展を遂げました。

しかし、国際競争、規制緩和など、昨今の農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。町を代表する農業地帯である当地域におきましても、後継者、高齢化、耕作放棄地などの様々な課題を抱えており、地域の方々が一丸となってハード・ソフト両面で抜本的な改革に取り組む時期が来ているのではないかと感じます。

皆様方のご活躍をご期待申し上げます。

田原町農業協同組合 代表理事組合長 岡本 勝

整備促進のための計画づくり

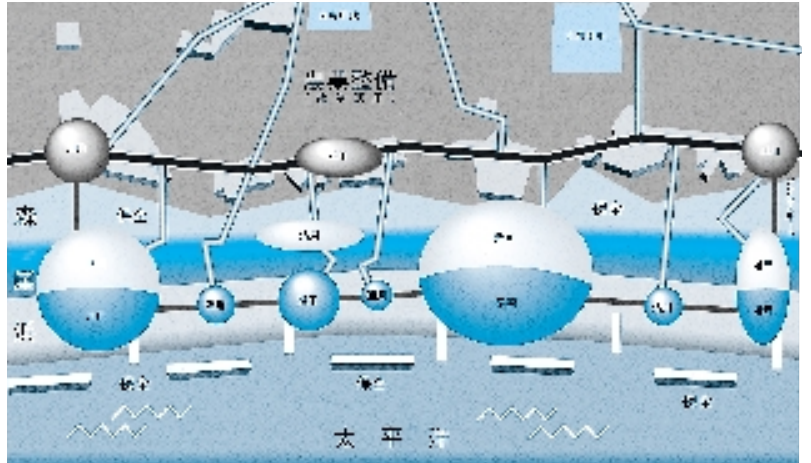
平成9年3月策定 太平洋岸地域整備基本構想

「サングリーン21」

田原町の太平洋岸地域を「海浜エリア」「崖森エリア」「農地エリア」に区分し、それぞれのエリアで効果的な活用・保全を図るために拠点を設けて整備を進めます。

導入が見込まれる機能

農地エリア	農地基盤整備、集落環境整備等
崖森エリア	保全事業、施設整備等崖森活用
海浜エリア	海岸線保全、観光・漁業施設整備等
共通	各種道路活用・整備、気候活用



平成10年3月策定 海浜・崖森エリアの基本計画

目標とする地域像「表浜自然ふれあいガーデン」海浜・崖森エリア専門部会(H9.11～H10.3)



計画により建設された海岸便所(大草海岸)

田原町太平洋岸の海浜・崖森エリアを中心とした全地域(汐川以南)を、海と森と農村における「人と自然」及び「人と人」がふれあう庭といったイメージで整備します。その実現では、海・砂浜・崖・森・農地の保全・利用を図ると同時に、レクリエーション・保養・学習などの機能(施設)の導入を図ります。

実現化プラン

表浜地域の各種課題に対し、ソフト事業の実施・支援・推進から施設整備等のハード事業へと展開する5つの実現化プランを作成しました。この実現化プラン(表浜健康海浜プラン)に基づく、最初のソフト事業として実施されたのが、「第1回表浜自然ふれあいフェスティバル」です。

報告書は各公民館にありますのでご覧ください。

平成10年10月策定 農地エリア整備の地元検討書

検討素案「農村・農地再生プラン」農地エリア専門部会(H9.11～H10.10)



農業者の減少・高齢化、農地の荒廃など、表浜地域の農業は様々な問題を抱えています。こうした現状を把握した上で、農地や農村集落において、資源として活用すべきものと改善・整備が必要となっているものとに区分して、土地利用構想図を作成しました。

作成した資料

「現況課題整理表」及び「現況課題マップ」
「事業計画整理表」及び「土地利用構想図」

報告書は各公民館にありますのでご覧ください。

地引網

太平洋の自然を満喫する健康的なレジャーとして人々を魅了する地引網は、長い歴史を持ち、昔は表浜の人々の暮らしと深い関わりをもっていた。

暮らしと網

北と南が海に面する渥美半島の人々は、古くから生計の手段として漁猟を営んでいた。特に近世になって農地が整備されるまで、少ない耕地と極度に水が乏しかった表浜地域にとって、生活費を補充する唯一の手段であり、貧困農民達が農閑に労働力と資金を集結し、地先の回遊魚を捕獲する百姓漁業であった。

網組織は、室町時代頃にその部落の政治・経済の有力者である親方「網元(あみもと)」を中心に成立し、網子(あんご)を雇って漁労経営する形態であった。以後、株式の組織になり、村持、共有制へと次第に変化していったが、その網の形態は主たる生活手段である農地の所有状態に左右されていた。

また、網子は年齢・経験・技能で配役され、階級的で礼儀は堅く守られていた。表浜の村々には地引網が組織され、昭和20年代までは漁獲高も多く、大草から六連までの間に18網があり、専業漁師も大勢いた。しかし、不漁続きや港がなく機械化が進められなかったことなどにより、昭和30代終りには生業としての地引網は消滅し、その後は趣味として一部の者によってポツポツ続けられてきた。

地引網が盛んだった頃は、方辺(ほうべ)の崖上で山見(魚群を見張る者)が合図を出すと、村の男衆は長さ15mの「テントウ船」に15~20人が乗込み海に出て網をかけた。一方、女達は浜で網を上げるのを手伝った後、魚を籠に入れて棒の前後に吊るし、肩にいなって方辺の上に運んだ。イワシが大漁の時は、浜辺で煮干しや田畑の肥料に加工した。

豊川用水の通水により農業生産は飛躍的に向上し、地域と浜との関わりは薄くなった。現在の地引網は、表浜を訪れる観光客や小中学校、老人会などのレクリエーションとして存続している。

漁の種類

魚群を包囲し浜に引寄せせる「地引網」と、海上で網を上げて魚をとる「刺目網」に大別される。また、針付きの棒を引きずり浅海の底魚を引掛ける「ズリ」という漁法も行われている。

地引網にも、前網(おかあみ)と沖の網(おきのあみ)とがある。渚から約3kmの沖で網をかける沖の網は、網も大きいので二船でかける。また、魚群を確認してかける「色見がけ」と、一定の箇所にかけてみる「ヒラガケ」とがある。刺目網は、帯状の網を海中に垣根のように張り、魚を網の目にかからせ或いは巻き付けて捕獲する。流し網ともいう。

観光地引網のかけ方(前網のヒラガケ)

網と綱を積み込んだチョ口船(長さ約8m、幅約2mで船外機付き)を、砂浜の上を7、8人で滑らせながら海に入れ、そのまま乗込む。

海岸から約200m沖に出たところで、西から東へ船を回しながら魚群を囲い込むよう半円状に綱(丈2m・長さ約270m)を入れる。網には浮きが着いており、海面付近の魚を中央部の袋(長さ約20m)に追い込み捕獲する。

網をかけ終わったらすぐに、両端の綱を引きながら皆で網を引寄せせる。人手が足りない場合、昔は牛でロクロを回して引いたが、昭和40年代頃からトラクターを使うようになった。



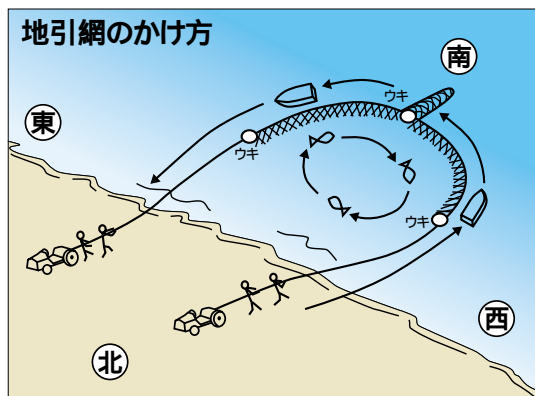
滑りの良い堅い木で作った「ワク」の上を滑らして、船を海まで押して行く。



沖で、船を回して網をかける。



参加者が大勢の場合には、全員で網を引く。



The history of Dragnet



地引網の袋の入り口(直径約2m)



牛を使って網を引いていた頃(写真提供:寺田博之)

表浜の魚



地引網に入る魚(イワシ)



刺網に入る魚(上:エソ、中:カマス、下:キス)

地引網や刺網に入る魚の種類と時期

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
サバ												
キス												
タイ												
コノシロ												
エソ												
アジ						ガンバ	セイゴ	コアジ				
オオイワシ											ヒヨゴ	
カタクチイワシ			チリメンジャコ									
コウナゴ												
セイゴ・スズキ												
イナダ							アゴ					
カマス												
タチウオ												
イシモチ												

年によって多少異なります。

おとな魚



アジ



サバ



スズキ



キス



コノシロ



イシモチ



カタクチイワシ



タチウオ

地引網

地引網最盛期の頃

お伊勢参り

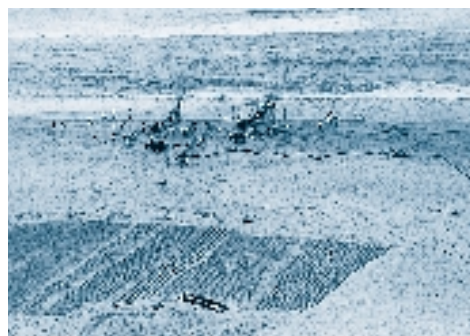
旧正月が過ぎた頃になると、網仲間ごとで各浜から TENTU 船に乗って、毎年お伊勢参りに出かけた。東風(こちかぜ)が吹いた時に浜を漕ぎでて、沖では帆に風を受けて進み、半日ほどで伊勢の港に到着した。伊勢神宮へお参りしながら2日ほど遊んでから、今度は西風に乗って自分達の浜に帰ってきた。今ではお伊勢参りは、自動車とフェリーボートで楽々行けるが、季節風を利用したとはいえ、太平洋の荒波を漕いでの旅路は大変なものであり、昭和30年代後半には地引網とともに途絶えてしまった。



お伊勢参りにも使った TENTU 船で遊ぶ小学生(昭和35年)

煮干し・干し鰯づくり

イワシが大漁だった時は、網から揚った魚を浜の上に据えた釜で茹でて「煮干し」に加工し出荷した。また、イワシを浜辺で干して作った肥料「干し鰯(ほしか)」は、田畑に入ると作物の出来がぐんと良くなった。



牛で網を引いてイワシを浜に干している風景(昭和30年代)

塩づくり

太平洋戦争の終戦前後には、小学校児童などが表浜の砂浜で塩づくりをした。明治時代に専売制となってから製塩は途絶えていたが、諸物資が欠乏した戦中・戦後には塩を含んだ砂を樽に集めて濃度の高い海水を作り、それを大釜や端それ釜で煮詰めて塩をつくっていた。

(写真提供:山田照夫)



イワシが入った地引網の袋に集まる網の衆(昭和30年代)



イワシが入った地引網の袋に集まる網の衆(昭和30年代)

NOW

現在の浜

沖の漁船

現在表浜には、三河湾内の篠島、日間賀島、豊浜、師崎、幡豆、西浦、遠州の新居、浜名などからたくさんの漁船が来て、うたせ網や底引網などの漁業を行っている。なお、海岸から約2km沖までは地元の漁業権が設定されている。

サーファー

表浜には、豊橋周辺、大阪、京都、岐阜などからサーフィンやボディボードを楽しむために、一年を通して大勢の若者達が訪れている。近年は、アウトドア志向の高まりなどにより来訪者の増加が著しく、夏季の各海岸に自動車がいっぱい並んでいる様子は、田原町一のレジャースポットではないかと思わせる。来訪者の増加に伴い、ゴミや治安上の問題も心配されますが、なかには自ら清掃活動やマナー向上の運動をしている者も見られる。

観光地引網

大草(おおくさ)海岸地引網
代表者:富田正和 TEL05312-2-0505

谷ノ口(やのくち)海岸地引網
代表者:広中一盛 TEL05312-7-0247

東ヶ谷(とうがや)海岸地引網
代表者:大羽正敏 TEL05312-7-0644

百々(どうどう)海岸地引網
代表者:鈴木 計 TEL05312-7-0451

西浜田(にしはまだ)海岸地引網
代表者:高崎清一 TEL05312-7-0438

久美原(くみはら)海岸地引網
代表者:大河隆郎 TEL05312-7-0457

利用料金は一網6万円です。
昼間及び夕方に各網代表者に
電話でお申し込み下さい。

「大漁不動様」

山田もと

六連の百々あたり、表浜には毎日毎日、どうどう、どどーどどーと波が打ち寄せとる。

今日も昨日も、千年も万年も前からおんなじ音をして波が打寄せとる。そいで百々(ドク)の名が付いたんだと。

その頃、さあて60年も前にならあか。この片浜十三里といわれとる遠州灘一帯じゃあ、ようけ大イワシだのサバだのがとれてのん、毎日のように大漁だっただ。

とれたての大イワシを、網の引上げられた場所からほうべの上り口の広場まで、いない上げるのが浜の女衆の仕事だったで、ぐっすりイワシの入った魚籠を棒の両端に下げているうなあ重くてのん、嫁にきたばっかしの時にゃあ、腰が立たんほどだったに。その広場で、大釜で煮たり干いたりして煮干しにせたもんだが。

あの日も大漁で、網はだいたい東の方へ上がったずら。おくまさら仲間、いつものようにイワシをいなくて波打際を歩いとった。おくまさの足に何かすっかかったけど、何のごんどうずらと思つて振りはらったままで、重いイワシをいなくて行くことに一心だったとよ。

イワシを広場へ置いてきて、また通つたら、また何かすっかかったげえな。「はて、何がすっかかるだかやれ。」と、魚籠を下におろいて、そよう拾い上げて見たと。

「あれれ。」潮に洗いさらされている一尺そこそこの木片だけど、何やら人の形をしてござる。

「ほい、こやなんずら。ただの木片じゃないぞん。お顔があるようだし、足もあって。」浜の男衆に見てもらつただ。

「おおー、こやあお不動様じゃあないか。」

「こやあ確かにお不動様の憤怒の相だ。足も二本、だいで傷んでおいでるが、こやあたしかにお不動様だ。」

「昔しあ、海難除けや大漁祈願に、船の舳先にお祀りしたこともあつたと聞いたことがあるぞ。」

「こんなりじゃあもつたいないのん。」そやお祀りせにゃあ。」ということになつてのん。豊橋の佛師さんに、傷んどるところを直してもらつただ。そいで、ほうべの中ほどの崖上で海が見渡せる所に、小さな祠を作つてお祀りしただ。そや立派なもんだつたが。

このお不動様をお祀りしてからは大漁が続いてのん、ようころばかいもんだが。ころばかす？。そうだよ、ころばかすてやのん。魚がいっぱいに入って竹の筒のようになった網袋を、波打際で構にして、冬でも真裸の網の衆が掛け声を揃えて押し上げるだ。

そやあ勇ましいもんだに。その声がおかまでも聞こえてくると、網に出とらん家のおっかささんらまで、「ほい、ころばかいとるで、ちいともらつてこまいかん。」なんてつて、籠をぶらさげて浜へ走つたもんだつたよ。

そいで、旦那が網へ出とるおっかささんらは、夜毎うしみつ時に崖の上までお参りに来たげえな。大漁ありがとうござんす。明日も大漁をおさずけ下されつてのん。

お不動様のお祭りてや、28日だけえなということで、12月28日をお祭りの日と決めただ。その日にゃのん、洞仙寺の和尚さんに、崖上の祠前でお経をあけてもらい、皆でお参りした後、広場でたあへんな餅を投げただ。

この日は網の衆をはじめ、子供もおばあさんも字じゅう皆出て、お参りをしたり餅を拾ったりしたもんだつたに。

それがまた不思議なことに、このお祭りの日にゃあきつと大きな色見が来てのん、網の衆らは餅投げもそこそこに舟を出いたもんだつたに。両隣りの中網と新谷の網のもんはけなるがつてのん。

今はのん、網を引く若いもんが少なくなつて、地引網はかけんくなつてしまつたのん。賑やかだつた浜は、淋しくなつてしまつたのん。それに大きい台風でお不動様のある崖が崩れて祠が危なくなつたんで、元の網の衆で洞仙寺様にあずかつてもらうことにしただよ。小さなお厨子を作つてお祀りしておくれとるだ。

お祭りは12月28日ではいかにも押しつまって忙しいもんで、今じゃあ11月の28日にせるだ。

ほうべの時とおんなじように、餅投げをして賑やかなもんだがね。



ウミガメの救助

田原町の表浜は、隣の豊橋市、赤羽根町に比べ海岸の浸食が著しく、砂浜が狭くなったためウミガメの産卵は、今ではあまり見ることができなくなりました。

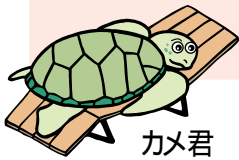
この写真は、大草海岸の消波堤にはまって仰向けになったアカウミガメを、浜の人達がレッカー車を使って救助した時のようすを撮影したものです(平成3年)。



ウミガメの救助



昭和40年代の海岸風景



カメ君

「皆さんの力で、以前のように安心して卵を産める広い砂浜を取り戻してはいただけないでしょうか。」

平成11年度の事業計画

主催事業

第2回表浜自然ふれあいフェスティバル

日時：平成11年10月23日(土) 午前9時30分～午後1時頃
悪天候の場合は11月13日(土)に延期

場所：表浜一帯(メイン会場は大草海岸)

内容：清掃活動、地引網、太鼓演奏ほか

目的：表浜の良さ、浸食等の現状を広く知らしめ
海岸整備の促進を図る。



南神戸海岸の治山工事

第1回表浜自然ふれあいフェスティバル

昨年開催



平成10年11月14日(土) 午前9時から表浜海岸全域でゴミを拾ったあと、大漁旗と横断幕が飾り付けられた谷ノ口海岸に約600人が集合し、地引網、石焼きイモ、バーベキュー、潮騒鍋などで懇親会を行いました。そして、午後1時には表浜の4校区が協力しあって行う初めてのイベントも、盛況のうちに無事終了しました。

推進事業

- ・ 海岸保全施設の整備[大草海岸]: 愛知県土木部
- ・ 海岸治山事業[南神戸・東神戸・六連]: 愛知県東三河事務所
- ・ 海岸案内看板の設置[各校区1箇所]: 田原町経済部商工課
- ・ 海岸駐車場の整備[大草海岸]: 田原町経済部商工課
- ・ 海岸進入道路の整備[大草地区]: 田原町建設部土木課
- ・ 農地基盤再整備構想策定[表浜地域全域]: 田原町経済部農業土木課
- ・ 農村総合整備事業[神戸地区]: 田原町経済部農業土木課
- ・ 農村環境計画[町全域]: 田原町経済部農業土木課

本協議会では、本誌の記事を募集します。
「写真」昭和40年以前の暮らし、風景、表浜の動物・植物など
「むかし話」地域に伝わっている昔話など